

韓日両言語の方言接触における対照研究

—否定極性表現の場合を中心に—

朴江訓*

(e-mail : hun0531@naver.com)

<目次>

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1. 問題提起 | 3.1. 韓日両言語における文法化の対照: 方言接触の観点から |
| 2. 「밖에·뿐이」 vs. 「しか·ほか」 | 3.2. 韓日の「標準語vs.方言」に対する言語政策の対照 |
| 2.1. 六つの統語環境における統語的特徴 | 4. おわりに |
| 2.2. 韓日両言語における相違点 | |
| 3. 考察 | |

キーワード：対照研究(Contrastive study), 否定極性表現(Negative polarity item), 方言(Dialect), 標準語(Standard language), 言語政策(Language policy)

1. 問題提起

本稿の目的は、韓日両言語において限定を表す否定極性表現(Negative Polarity Items)の統語的特徴が先行研究の指摘と違い異なっていることを明らかにし、なおかつその相違点が見られる理由を探ってみることである。否定極性表現は下記のように統語的に否定辞と呼応しなければならぬ。

- (1) a. 칠수밖에 오지 않았다.
b. *칠수밖에 왔다.
- (2) a. 太郎しか来なかった。
b. *太郎しか来た。

* 全州大学校 助教授, 日本語学・対照言語学

このような否定極性表現の統語的特徴は興味深いものであり、従来多くの言語において否定極性表現の研究が盛んに行われている。

本稿の研究対象は限定を表す韓日両言語における否定極性表現の「밖에・뿐이」と「しか・ほか」である。上述の(1)と(2)において否定極性表現としての「밖에」と「しか」の例を提示したが、「뿐이」と「ほか」も下記のように否定極性表現としての働きを持つ。

(3) a. 미자뿐이 안 왔다.

b. *미자뿐이 왔다.

(구종남(2012:34))

(4) a. 太郎のほか(誰も)来なかった。

b. *太郎のほか(誰も)来た。

(朴(2009:123))

(1)-(4)で見た「밖에・뿐이」と「しか・ほか」は次のような統語的及び意味的類似点を持つ。まず、これらの表現は(1)-(4)のような統語的環境において否定辞と必ず共起しなければならない。次に、これらの表現は意味的に「限定」の意味を持つ。他にも、これらの表現は次のような共通点を持っている。それぞれの表現の源流を探てみると、中央語と方言との対立関係を示している。すなわち、구종남(2012)によると韓国語の「밖에」は中央語であるのに対し、「뿐이」は全羅道・忠清道などにおける方言である。また、宮地(2007)によると日本語の「しか」は東国方言・江戸語・東京方言(中央語)と連なる東国方言であるのに対し、「ほか」は古語・上方語・大阪方言と連なる近畿方言圏に属する。以上の内容をまとめて提示すると、以下のようになる。

(5) a. 「밖에」の源流：ソウル方言(→中央語)

b. 「뿐이」の源流：全羅道・忠清道などの方言

(6) a. 「しか」の源流：東京方言(江戸語→中央語)

b. 「ほか」の源流：近畿方言(上方語)

以上、韓日両言語の限定の否定極性表現「밖에・뿐이」と「しか・ほか」の類似点を見た。これらの表現の上述した類似点に基づき、구종남(2012)は「밖에」と「뿐이」を、Martin(1975)、洪(1979)、Nam(1994)などは「밖에」と「しか」を、A.H.-O Kim(1997)は「밖에」と「ほか」を、山口(1991)、江口(2000)、茂木(2005)、宮地(2007)などは「しか」と「ほか」を類似表現として取り扱っている。しかしながら、これらの韓日両言語の表現は下記のような相違点が存在する。

- (7) a. *太郎はりんごしか決して食べなかった。
 b. 太郎はりんごのほか(何も)決して食べなかった。
- (8) a. 山小屋はここからしか見えなかった。
 b. *山小屋はここからほか見えなかった。
- (9) a. 지금 집에는 영희밖에 아무도 없다.
 b. 지금 집에는 영희뿐이 아무도 없다.

(구종남(2012:48))

- (10) a. 그는 학교에서밖에 공부를 안 한다.
 b. 그는 학교에서뿐이 공부를 안 한다.

(同:49)

(7)と(9)、そして(8)と(10)は同様の統語的環境であるにも関わらず、日本語と韓国語において相違点が見られる。すなわち、日本語においては(7)と(8)のように非対称性が見られるのに対し、韓国語においては(9)と(10)で分かるように非対称性が見られないのである。紙幅の都合上、ここでは二つだけ挙げたが、他にも四つの構文において相違点が見られる。このことから韓日両言語における限定の否定極性表現は何らかの相違点が存在していることが示唆される。管見の限りにおいて、先行研究ではこのような問題点について指摘されたことがない。本稿はこのような問題を踏まえ、韓日両言語における限定を表す否定極性表現の相違点を明らかにし、このような相違点が見られる原因について仮説を立てるなど探ってみる。また、本稿ではこのことを共時的及び通時的アプローチで明らかにする。

2. 「밖에 · 뿐이」 vs. 「しか ·ほか」

前節でみた韓日両言語における否定極性表現「밖에 · 뿐이」と「しか ·ほか¹⁾」はその統語的特徴において異なる様相が見られる。以下ではその六つの統語環境における統語的特徴を見た後、両言語における相違点について述べる。

2.1. 六つの統語環境における統語的特徴

1) 事実、日本語における限定を表す否定極性表現には、「しか ·ほか」以外にも「きり ·より」が挙げられる。後の3節でも述べるが、現代日本語において「ほか」は「しか」との競争関係で敗北してしまい、脱文法化が進んでいる。このような脱文法化は「きり」と「より」にも見られる。「きり」の脱文法化に関する研究は朴(2015b)を、「より」の脱文法化に関する研究はPark(2018)を参照されたい。ただし、本稿では従来韓日両言語の研究対象としてよく挙げられてきた「しか ·ほか」を研究対象とする。

本節では両言語の相違点を記述的アプローチで具体的に見ていく。両言語は以下の六つの統語的環境において異なる振る舞いを示す。

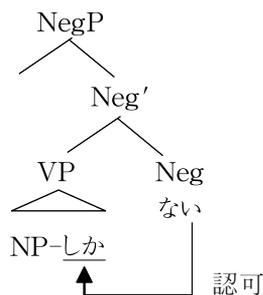
2.1.1. 否定文にのみ生起可能であるか否か

まず、日本語の場合から見る。1節において「しか」と「ほか」は否定述語と共起しなければならないと述べた。ただし、両者は否定辞からの認可条件が異なっているようである。下記の例を持って説明する。

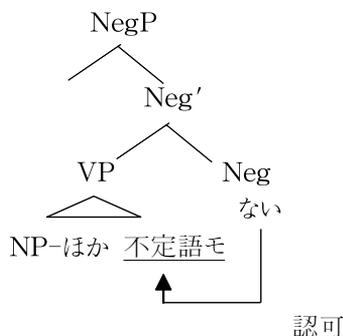
- (11) a. 太郎はりんごしか食べなかった。
 b. 太郎はりんごのほか(何も)食べなかった。
 c. ??太郎はりんごのほか食べなかった。
- (12) a. 太郎しか来なかった。 (= (2a))
 b. 太郎のほか(誰も)来なかった。 (= (4a))
 c. ??太郎のほか来なかった。

「しか」と「ほか」が(11a)(12a)と(11b)(12b)のように否定文に現れなければならないという事実から、先行研究では両者を否定極性表現として取り扱ってきたわけである。しかしながら、「ほか」は(11c)(12c)のように単独で用いられるとその許容度がかなり落ちてくる。朴(2009)はこのような点に着目し、(11b)(12b)の文において否定辞と呼応するのは、「ほか」自身ではなく「ほか」の隣りで非顕在的に(covertly)現れている「誰も・何も」のような「不定語(Indeterminate)モ」であると主張する。言い換えると、(11b)と(12b)において否定辞とそれぞれ呼応するのは「何も」と「誰も」である。これに対し、(11a)と(12a)において否定辞と呼応しているのは「しか」自身である。このような「しか」と「ほか」の認可条件を樹形図で示すと下記のようになる。

〈図1〉 a. 「しか」の認可条件



b. 「ほか」の認可条件



(朴(2009:135)を一部改変)

要するに、現代日本語において「ほか」は厳密に言うと、否定極性表現というより準否定極性表現 (pseudo negative polarity item)により近いのであろう。

次は韓国語の場合を見る。「밖에」と「뿐이」は下記の統語的環境において必ず否定文に生起しなければならない。また、両者とも単独で用いられ、否定辞と直接呼応している。

(13) a. 철수밖에 오지 않았다. (= (1a))

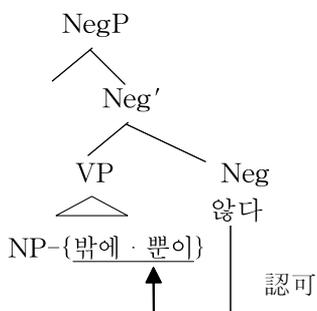
b. 철수뿐이 오지 않았다.

(14) a. 철수는 사과밖에 먹지 않았다.

b. 철수는 사과뿐이 먹지 않았다.

以上で見た「밖에」と「뿐이」の認可条件を樹形図で大まかに示すと下記のようになる。

〈図2〉 「밖에・뿐이」の認可条件²⁾



2) ただし、朴(2010b)によると「밖에」は「しか」と対応する用法と「ほか」と対応する用法、すなわち2種類の用法が存在する。〈図2〉における「밖에」は「しか」と対応する場合である。今後詳しい研究は必要であるものの、「뿐이」も「밖에」のように2種類の用法が存在すると思われる。詳細は稿を改めて論じたい。

以上、日本語の「しか」は否定文にのみ生起可能で、真の否定極性表現(true negative polarity item)として働くのに対し、「ほか」は準否定極性表現として働くことを見た。また、韓国語の「밖에」と「뿐이」両者は否定文にのみ生起可能で、真の否定極性表現として働くことを見た。

2.1.2. 多重否定極性表現構文に生起可能であるか否か

同一節内において否定極性表現が多重共起した文を多重否定極性表現構文(multiple negative polarity item constructions)と呼ぶ。代表的な例として下記のように「誰も」、「何も」のような「不定語モ」や「一人も」、「一つも」のような「1+助数詞モ」が多重共起した例が挙げられる。

- (15) a. [不定語モ-不定語モ] 誰も何も食べなかった。
 b. [不定語モ-1+助数詞モ] 誰も本を一冊も買わなかった。

(朴(2019:71))

このような多重否定極性表現構文は韓国語にも同様に見られる。日本語の(15)を韓国語に訳すと(16)のようになり、これは日本語と同様に適格文である。

- (16) a. [不定語도-不定語도] 아무도 아무것도 먹지 않았다.
 b. [不定語도-1+助数詞도] 아무도 책을 한 권도 사지 않았다.

次に、日本語の「しか」と「ほか」が多重否定極性表現構文に生起可能であるか否か見てみる。「しか」は下記のように同一節内において他の否定極性表現と共起できないのに対し、「ほか」は共起可能である。

- (17) a. *太郎はりんごしか決して食べなかった。
 b. 太郎はりんごのほか(何も)決して食べなかった。
 (18) a. *太郎しか何も食べなかった。 (Park(2014:156))
 b. 太郎のほか(誰も)何も食べなかった。

(17)は「しか・ほか」がそれぞれ否定極性表現「決して」と共起した文であるが、「しか」は許されないのに対し、「ほか」は許される。(18)は両者がそれぞれ否定極性表現「何も」と共起した例

であるが、「しか」は許容されないのに対し、「ほか」は許容される。事実、Park(2014)(2015)など多くの先行研究は、日本語の「しか」は同一節内において他の否定極性表現と共起できないと指摘する³⁾。

他方、韓国語の「밖에」と「뿐이」は下記のように同一節内において他の否定極性表現と共起できる。

- (19) a. 지금 집에는 영희밖에 아무도 없다.
b. 지금 집에는 영희뿐이 아무도 없다.

(=(9))

- (20) a. 동수밖에 아무도 안 갔다.
b. 동수뿐이 아무도 안 갔다.

(同:49))

(19)(20)は「밖에」と「뿐이」が同一節内において否定極性表現「아무도」と共起した文であるが、両者とも許容される。

以上、日本語の「しか」は多重否定極性表現構文において用いられないのに対し、「ほか」は用いられることを見た。また、韓国語の「밖에」と「뿐이」両者は多重否定極性表現構文において用いられることを見た。

2.1.3. 反語構文に生起可能であるか否か

朴(2010a:165)は日本語記述文法研究会(2007:285)を引用し、反語について次のように定義する。

- (21) 反語とは、疑問文の形をとりながらも、事実の成立を強く否定することを表す表現である。

また、朴(2010a:165)は山口(1991)を引用し「日本語史において「しか」、「ほか」が現れる前にこれらの表現と統語的及び意味的に類似した表現が存在しており、これらの表現は否定辞と呼応する用法を備える前に反語表現としての用法を先に備えた」と指摘する。すなわち、これらの表現が否定辞と呼応しなければならないという否定極性表現としての文法素性(syntactic feature)が現れる前に反語表現としての素性が先に現れたということである。

3) 両者のこのような相違点が生じる理由に関しては、Park(2014)を参照されたい。

それでは「しか」と「ほか」は反語構文(adversative prediate)に生起可能であるか否か見てみる。

- (22) a. *これを支援するひとは彼しか誰がいるのか。
 b. これを支援するひとは彼のほか誰がいるのか。
 (23) a. *太郎ができる仕事ってこれしか何があるのか。
 b. 太郎ができる仕事ってこのほか何があるのか。

(朴(2010a:164))

朴(2010a)によると、「しか」は(22a)(23a)のように反語構文に生起できないのに対し、「ほか」は(22b)(23b)のように生起できる⁴⁾。

次は韓国語の場合を見る。구종남(2012)によると、韓国語の「뿐이」は下記のように反語構文において問題なく用いられる。

- (24) a. 너뿐이 누가 아냐?
 b. 내가 집뿐이 갈 데가 있냐?
 c. 먹을 게 밥뿐이 더 있어야지.

(구종남(2012:35))

시정곤(1997)は「밖에」は反語構文において用いられると指摘する。以下の例文を見てもらいたい。

- (25) a. 물밖에 남은 게 있어야지!
 b. 날씨가 이렇게 무더우니 죽어나는 건 우리밖에 더 있냐?

(시정곤(1997:180))

事実、(24)における「뿐이」の代わりに「밖에」を入れ替えても(26)のように許容される。

- (26) a. 너밖에 누가 아냐?
 b. 내가 집밖에 갈 데가 있냐?

4) 両者のこのような相違点が生じる理由に関しては、朴(2010a)を参照されたい。

c. 먹을 게 밥밖에 더 있어야지.

以上、日本語の「しか」は反語構文において用いられないのに対し、「ほか」は用いられることを見た。また、韓国語の「밖에」と「뿐이」両者は反語構文において用いられることを見た。

2.1.4. 後置詞、副詞などさまざまな項目に後接可能であるか否か

朴(2014b)によると、「しか」と「밖에」は否定極性表現の他にもう一つの文法素性を持っている。というのは、これらの表現は副助詞としても働くことである。日本国語大辞典(2004)は副助詞の定義において、「副助詞とは助詞の一種で、用言に関係ある語に付いて、下の用言の意義を限定する助詞で、格助詞に上接も下接もする」とされる。韓国語においても日本語の副助詞に対応するものがあり、韓国語では「補(助)助詞」または「特殊助詞」と呼ばれている(朴(2014b:38))。副助詞は日本国語大辞典(2004)で指摘されているようにさまざまな項目に後接できる。本節ではこのような副助詞の統語的特徴に注目し、限定を表す「しか・ほか」と「밖에・뿐이」が後置詞、副詞などさまざまな項目に後接可能であるか否か見てみる。

まず、日本語の「しか」の場合から見てみる。

(27) [後置詞+しか]

- a. [クチジロシカは] 青蔵高原の標高四千メートル以上の高知にしか生息していない。
- b. この店の酒はそれまでは東京のおでん屋でしか飲んだことがないものだった。
(寺村(1991:140))
- c. お互いの敬意、恥を知る心からしか生まれません。
(秘伝)
- d. このような秘境の景観は列車でしか味わうことができない。(世界のスーパーエクスプレス)

(28) [副詞/副詞句+しか]

- a. ゆっくりしか歩けない。
- b. 世間でも伝説のようにしか思われていない。
(寺村(1991:140))

(29) [引用マーカー「と」+しか]

- a. まだ三十歳の彼は、「何を言っているんだ」としか思わなかった。
(中年なじみ)
- b. 今のこの状況は予想外の展開だったとしか言えない。
(高雅にして感傷的なワルツ)

(27)–(29)において「しか」はさまざまな項目に後接できることを見た。これに対し、「ほか」はほとんど不可能であることを示す。(30)–(32)をもって確認する。

(30) [後置詞+ほか]

- a. * [クチジロシカは] 青蔵高原の標高四千メートル以上の高知にほか生息していない。
- b. *この店の酒はそれまでは東京のおでん屋でほか飲んだことがないものだった。
- c. *お互いの敬意、恥を知る心からほか生まれません。
- d. *このような秘境の景観は列車でほか味わうことができない。

(31) [副詞/副詞句+ほか]

- a. *ゆっくりほか歩けない。
- b. *世間でも伝説のようにほか思われていない。

(32) [引用マーカー「と」+ほか]

- a. *まだ三十歳の彼は、「何を言っているんだ」とほか思わなかった。
- b. *今のこの状況は予想外の展開だったとほか言えない。

次は韓国語の場合を見る。박승윤(1997)、구종남(2012)などによると、「밖에」はさまざまな項目に後接できる。(33)は後置詞に、(34)は副詞/副詞句に、(35)は引用マーカー「고」に後接した場合である。

(33) [後置詞+밖에]

- a. 철수는 영화를 학교에서밖에 만나지 않는다.
- b. 철수는 자전거로밖에 가지 않는다.
- c. 철수는 영화를 오전에밖에 만나지 않았다.
- d. 철수는 돈을 영회에게서밖에 받지 않았다.

(박승윤(1997:63))

(34) [副詞/副詞句+밖에]

- a. 나는 다리가 아파서 천천히밖에 못 걸어.
- b. 나는 그것이 희미하게밖에 기억이 안 나.

(구종남(2012:49))

(同:50)

(35) [引用マーカー「고」+밖에]

- a. 그녀의 업적은 그저 대단하다고밖에 표현할 수 없겠어요.
- b. 나는 철수가 거기에 있었다고밖에 다른 말은 안 했다.

구종남(2012)によると、「뿐이」は上述した「밖에」のようにさまざまな項目に生起可能である。(36)–(38)をもって確認する。

(36) [後置詞+뿐이]

- a. 그는 학교에서뿐이 공부를 안 한다. (=10b))
- b. 그것은 가위로뿐이 잘라지지 않는다.
- c. 명호는 이를 아침에뿐이 안 닦는다.
- d. 은주는 그것을 영이에게뿐이 안 주었다.

(37) [副詞/副詞句+뿐이]

- a. 나는 다리가 아파서 천천히뿐이 못 걸어. (구종남(2012:49))
- b. 나는 그것이 희미하게뿐이 기억이 안 나. (同:50)

(38) [引用マーカ―「고」+뿐이]

- a. 그녀의 업적은 그저 대단하다라고뿐이 표현할 수 없겠어요.
- b. 나는 철수가 거기에 있었다고뿐이 다른 말은 안 했다. (同:36))

以上、日本語の「ほか」は後置詞、副詞などさまざまな項目に後接できないのに対し、「しか」は後接できることを見た。また、韓国語の「밖에」と「뿐이」両者はさまざまな項目に後接可能であることを見た。このことから、「しか」、「밖에」、「뿐이」は副助詞としての働きを持っているのに対し、「ほか」は持っていないことが分かる。

2.1.5. 名詞に後接する際、属格助詞「의/의」が必要であるか否か

前節において「ほか」を除き、「しか」、「밖에」そして「뿐이」はさまざまな項目に後接できることを見た。これらの表現は下記のように名詞にも後接できる。

(39) [名詞+しか]

- a. 太郎しか来なかった。 (=2a)
- b. 太郎はりんごしか食べなかった。 (=11a)

(40) [名詞+밖에]

- a. 철수밖에 오지 않았다. (=1a)
- b. 철수는 사과밖에 먹지 않았다. (=14a)

(41) [名詞+뿐이]

- a. 철수뿐이 오지 않았다. (=13b)

- b. 철수는 사과뿐이 먹지 않았다. (= (14b))

「しか」、「밖에」、「뿐이」が名詞に後接する際に、属格助詞「の/의」は伴わない。これに対し、「ほか」が名詞に後接する時は、下記のように「の」が必ず伴われなければならない。

(42) [名詞+の+ほか]

- a. 太郎のほか(誰も)来なかった。
b. 太郎はりんごのほか(何も)食べなかった。

以上、「しか」、「밖에」、「뿐이」が名詞に後接する際、属格助詞「の/의」は必要ではないのに対し、「ほか」は必要であることを見た。このことから、現代日本語において「ほか」は名詞としての働きを持つことが示唆される。

2.1.6. 否定命令文に生起可能であるか否か

本節においては否定命令文において生起可能であるか否かについて見る。まず、日本語の場合から見る。朴(2015a)によると、「しか」は(43)のように否定命令文に生起可能である。

- (43) a. ここから先は危ないからそしか行くな.
b. 次の日、大変だから1時までしか勉強するな。

(朴(2015a:45))

これに対し、日本語の「ほか」は下記のように生起不可能である。

- (44) a. *パンのほか食べるな.
b. *君のほか来るな.

次は、韓国語の場合を見る。朴(2015a)によると「밖에」は下記のように否定命令文に生起できない。

- (45) a. *여기부터 앞은 위험하니까 거기밖에 가지 마.
b. *다음 날 힘드니까 1까지밖에 공부하지 마.

(同:46))

구중남(2012)は「뿐이」も「밖에」のように否定命令文に生起不可能であると指摘する。下記の例文をもって確認する。

- (46) a. *너뿐이 오지 마.
- b. *이 책뿐이 읽지 마.

(구중남(2012:36))

以上、日本語の「しか」は否定命令文に生起可能であるのに対し、「ほか」は生起不可能であることを見た。また、韓国語の「밖에」と「뿐이」両者も否定命令文に生起できないことを見た。

2.2. 韓日両言語における相違点

2.1節において「밖에・뿐이」と「しか・ほか」は六つの統語環境において異なる統語的特徴を示すことを見た。その内容を表でまとめると以下の〈表1〉と〈表2〉のようになる。

〈表1〉 「しか」と「ほか」の統語的相違点(可能・必要:√、不可能・不必要:*)

	しか	ほか
① 否定文にのみ生起可能であるか否か	√	*
② 多重否定極性表現構文に生起可能であるか否か	*	√
③ 反語構文に生起可能であるか否か	*	√
④ 後置詞、副詞などさまざまな項目に後接可能であるか否か	√	*
⑤ 名詞に後接する際、属格助詞「の」が必要であるか否か	*	√
⑥ 否定命令文に生起可能であるか否か	√	*

〈表2〉 「밖에」と「뿐이」の統語的類似点

	밖에	뿐이
① 否定文にのみ生起可能であるか否か	√	√
② 多重否定極性表現構文に生起可能であるか否か	√	√
③ 反語構文に生起可能であるか否か	√	√
④ 後置詞、副詞などさまざまな項目に後接可能であるか否か	√	√
⑤ 名詞に後接する際、属格助詞「의」が必要であるか否か	*	*
⑥ 否定命令文に生起可能であるか否か	*	*

〈表1〉と〈表2〉から次のことが示唆される。まず、日本語の場合、〈表1〉のように「しか」と

「ほか」が相互分布を成している。次に、韓国語の場合、〈表2〉のように「밖에」と「뿐이」は相互分布をなさず、両者ともまったく同様の働きをしている。以上のことから、韓日両言語における「밖에・뿐이」と「しか・ほか」は先行研究の指摘と違い異なった振る舞いを示し、両言語のこれらの表現は同一のものではないことが分かる。

実際に、Park(2014)は現代日本語の「しか」は否定極性表現及び副助詞として文法化がさらに進んでいるのに対し、「ほか」はこれらの文法素性から脱文法化が進み現在は準否定極性表現及び名詞としての統語的特徴を持っていると主張する。次節でまた述べるが、韓国語の「밖에」と「뿐이」においては前述した脱文法化は見られず、否定極性表現及び副助詞としての文法化のみ見られるようである。以上の両言語の二つの相違点をまとめると下記の表ようになる。

〈表3〉 韓日両言語における相違点

各表現は……	韓国語	日本語
① 相互分布をなしているのか	*	✓
② 文法化・脱文法化が同時に起きているのか	*	✓

〈表1〉 - 〈表3〉の両言語の相違点から次のような疑問点が浮かび上がる。なぜ韓日両言語の限定を表す否定極性表現「밖에/뿐이」と「しか/ほか」はそれぞれ異なった方言に属している異音同義語であるにも関わらず、日本語は〈表3〉のように相補的分布をなしているのに対し、韓国語はなしていないのか。なおかつ、なぜ日本語は韓国語と異なり、「しか」における文法化と「ほか」における脱文法化が同時に起きているのであろうか。先行研究において本節で提示された〈表1〉 - 〈表3〉の言語現象について指摘されたことがない。両言語におけるこのような言語現象は否定極性表現の研究においても解決しなければならない重要な研究課題である。1節でも述べたように韓日の多くの先行研究は「밖에・뿐이」と「しか・ほか」を類似表現として取り扱っているなど修正されるべき項目がまだまだたくさん残されているからである。

3. 考察

前節では先行研究の指摘と違い、「밖에・뿐이」と「しか・ほか」は〈表1〉 - 〈表3〉のような異なった言語現象を示していることを述べた。まず、本稿は韓日両言語において上述したような相違点が見られる原因に関して下記のような仮説を立てる。

(47) [仮説: 両言語において相違点が見られる理由]

- a. 日本語の否定極性表現は韓国語の場合と異なり、方言接触によるいわゆる脱文法化が行われている。朴(2012)とPark(2014)によると、江戸語の「しか」は上方語の「ほか」と接触して以来結局「しか」が否定極性表現として優位の位置を占め、「ほか」より文法化が進んでいる。競争関係で敗北してしまった「ほか」は否定極性表現から脱文法化が進んでいる。これに対し、ソウル方言の「밖에」は全羅道・忠清道などの方言「뿐이」と接触していても片方の脱文法化は起こらない。つまり、両者ともほぼ並行的に否定極性表現としての文法化が進んできたのである。
- b. 両言語の上記の相違点を引き起こす原因を説明する方法として社会言語学的アプローチが考えられる。つまり、両言語には(i)中央語の転移、(ii)標準語に対する言語政策の違いに決定的な理由がある。日本語は明治維新以来、江戸語を標準語として制定して以来標準語使いを政府主導で強く奨励していたのである。このことは、文法構造の変化にも影響を与え、上方語の「ほか」は江戸語の「しか」に負け、否定極性表現としての地位が徐々に失われてきたのである。これに対し、韓国語の場合上記の日本語で見られた(i)と(ii)は行われていなかったため「밖에」と「뿐이」はほぼ並行的に文法化されてきたのである。

以下では、上記の仮説が妥当であるかどうか検証していく。

3.1. 韓日両言語における文法化の対照: 方言接触の観点から

まず、日本語の文法化について見る。2節において現代日本語における「しか」と「ほか」は〈表1〉のように相補的分布をなしていると述べた。興味深いことに、明治期～昭和初期における「ほか」は〈表1〉と異なる振る舞いを示している。朴(2012)とPark(2014)によると、「ほか」は明治期～昭和初期において〈表1①④⑤〉の用法を全て持っていた。つまり、〈表1①④⑤〉は現代日本語において許容されないものの、明治期～昭和初期においては許容されていたのである。要するに、当時の「しか」と「ほか」は現代韓国語の「밖에」と「뿐이」のようにほぼ並行的に文法化が進んでいたのである。しかし、昭和初期以降、「ほか」は何らかの理由で否定極性表現及び副助詞の文法素性から脱文法化が進むようになる。これに対し、「しか」は否定極性表現及び副助詞としてさらに文法化が進んでいる。両者の文法化過程を示すと次のようである。

(48) 「しか」の文法化過程(Park(2014)を一部改変)

- | | | | | | |
|--------|----------|---|----------|---|---------|
| a. 段階: | Stage 3a | | Stage 3b | | Stage 4 |
| b. 時期: | 18C中期 | > | 19C中期 | > | 20世紀中期 |

- c. 範疇的變遷: 否・副I⁵⁾ > 否・副II > 否・副III
 d. 意味的變遷: 限定 > 限定 > 限定

(49) 「ほか」の文法化過程(Park(2014)を一部改変)

- a. 段階: Stage 1 Stage 2 Stage 3a Stage 3b Stage 4
 b. 時期: 9C ~ 17C初期 19C末期 20世紀中期
 c. 範疇的變遷: 名詞 > 副詞 > 否・副I > 否・副II > 準否・名詞
 d. 意味的變遷: 物理的空間 > 心理的範圍・除外 > 限定 > 限定 > 心理的範圍・除外

本稿は(49)における「Stage 4」の下線部に注目する。「ほか」は「しか」と異なり「範疇的變遷:準否定極性表現・名詞」と「意味的變遷:心理的範圍・除外」のように脱文法化が進んでいる。

朴(2012)とPark(2014)は「ほか」が「しか」と異なり現在脱文法化が進んでいるのは方言接触到起因すると主張する。방언연구회(2001)によると、方言接触(dialect contact)とは、2つの方言が地理的に及び社会的に隣接し接触が行われる現象を指し示す。多少異なるものの、互いに理解可能な方言を使用する話者間でコミュニケーションの際に発生する言語的接触のことを意味する。接触する2つの方言は互いに影響を及ぼすため該当の方言の話者は2つの方言を用いる時、方言のバリエーションの漸次的転移の様相が見られる。方言接触は言語接触の一つのタイプとして見ることができ、言語接触(language contact)の研究対象にもなる。朴(2012)とPark(2014)はこのような方言接触の観点から江戸語の「しか」は上方語の「ほか」と接触して以来結局「しか」が否定極性表現として優位の位置を占め、「ほか」より文法化が進んでいると主張する。競争関係で敗北してしまった「ほか」は否定極性表現から脱文法化が進んでいると主張する。

次は韓国語の文法化について見る。「밖에」と「뿐이」の文法化過程は(50)-(52)のようである。

(50) 「밖에」の文法化過程(Park(2014)を一部改変)

- a. 段階: Stage 1 Stage 2 Stage 3a Stage 3b Stage 4
 b. 時期: 15C中期 17C世紀 20C前期 20C中期 現在
 c. 範疇的變遷: 名詞 > 副詞 > 否・副I > 否・副II > 現在進行中
 d. 意味的變遷: 物理的空間 > 心理的範圍・除外 > 限定 > 限定 > 限定

(51) 「뿐이」の文法化(구종남(2012))

5) 朴(2014a)は韓日両言語における副助詞は次のような段階を経て後接すると主張する。

副助詞I:名詞・数詞などに後接(Stage 3a) > 副助詞II:さまざまな格助詞に後接(Stage 3b) > 副助詞III:複合助詞に接続(Stage 4)。

뽀+이고 > 「고」の脱落 > 뽀이(→再分析(Reanalysis))

(52) 「Stage 3a」以降の「뽀이」の文法化過程

- | | | | |
|-----------|----------|----------|---------|
| a. 段階: | Stage 3a | Stage 3b | Stage 4 |
| b. 時期: | 否・韻 I | > 否・韻 II | > 現在進行中 |
| c. 範疇的変遷: | 限定 | > 限定 | > 限定 |

「밖에」の文法化過程は(50)のようである。「뽀이」の通時的文法化過程は資料不足のため、特に「Stage 3a」以前の段階がまだ明らかになっていない。ただし、구종남(2012)は「뽀이」の文法化過程を(51)のように示している。また、朴(2014a,b)の韓日両言語における副助詞の文法化の一般化及び現代語における「뽀이」の実例から(52)のような文法化過程が伺える。本稿において注目するのは、(50)と(52)で見られる両者の文法化過程「Stage 3a>Stage 3b>Stage 4」のような類似点である。また、両者とも「Stage 4」は現在進行中である(詳細はPark(2015)を参照)。

以上、日本語の「ほか」は「しか」と異なり、脱文法化が起こっているのに対し、韓国語の「밖에」と「뽀이」は並行的に文法化が進んでいることが見られた。なぜ両言語にはこのような相違点が見られるのか。次節でその原因を探る。

3.2. 韓日の「標準語vs.方言」に対する言語政策の対照

前節で見た両言語の相違点は社会言語学アプローチから説明できると考えられる。19世紀末期以降、韓日の「標準語vs.方言」に対する言語政策には大きな相違点が存在する。真田(2006)、홍민표(2008)などによると、明治中期まで日本の庶民はほぼ方言によるコミュニケーションがほとんどであり、標準語は一切使われていなかったという。しかし、19世紀末期-20世紀中期においてナショナリズムの高揚とともに強力な標準語の普及政策が政府主導で展開され、方言は撲滅の対象になったとされる。真田(2000)は日本の標準語誕生の歴史を次のようにまとめている。

(53) 日本の標準語誕生の歴史(真田(2000)を一部改変)

- 前史(1863年の以前):近代標準語は東京語をもとに発展してきたが、その東京語の源流は江戸語である。上方語を源流とした近畿方言と東京語は競合関係になったが結局東京語が標準語として定められたのである。
- 登場期(1868-1945):東京帝国大学の上田万年氏を中心とした標準語の普及政策が活発に行われる。国語調査委員会などの運営。方言の弾圧時代。

- c. 完成期:テレビなどのマスコミを通じ、標準語が各地域に普及される。ほとんどの日本人は標準語と方言両方駆使できるバイリンガルになる。
- d. ポスト標準語時代:言語の多様性が認められ、最近、方言も尊重されるようになる。

上記の(53a-c)により、日本は19世紀末期-20世紀中期の間、政府の主導で方言は弾圧され、標準語使いが強く求められたことが分かる。興味深いことに、「ほか」の脱文法化は(49)でみたように20世紀中期から活発に行われるが、「20世紀中期」という時期が重なるのは単なる偶然ではないかもしれない。要するに、日本政府の主導で行われた標準語使い運動の理由で東京方言の「しか」は優位の地位を確保し、否定極性表現・副助詞として文法化がさらに進んでいるのに対し、競合関係で敗北してしまった近畿方言の「ほか」は否定極性表現・副助詞としての素性を徐々に失い「しか」が持っていない用法を確保しつつある。よって、現代日本語において両者は〈表1〉のような相補的分布をなしているのである。実際に、このような「江戸語vs.上方語」の方言接触による文法化及び脱文法化は否定辞の「ない vs. ぬ」、理由を表すマーカーの「から vs. さかい」、コンピュータの「ちや vs. だ」の例からでも伺える(小田(2000))。

これに対し、韓国の場合(53a-c)のような言語政策は取られていないようである。ただし、박갑수(2000)によると韓国も19世紀末から教科書作りなどをきっかけにソウル方言を標準語にしようとする動きが見られはじめた。また、김민수(1973)によると、韓国語は1933年朝鮮語学会により「한글 맞춤법 통일안」が制定されたという。要するに、韓国は政府主導ではなく、朝鮮語学会などの民間主導で標準語が定着されてきたのである。김민수(1973)、이태준(1996)、박갑수(2000)など内容をまとめてみると、韓国語は次のような点で日本語と大きく相違する。第一に、韓国語は日本語の(53b)でみた政府主導で行われた方言への強い弾圧などはほとんどなかったのである。第二に、朝鮮王朝がソウルを首都として制定し中央集権国家として続いてきたほぼ500年間、ソウル周辺の方言が中央語の地位を維持している⁶⁾。言い換えると、18世紀以降見られる日本の「上方語vs.江戸語」のような方言間の対立は韓国語ではほとんど見られなかったのである。

本稿は以上のような韓日語の(i)中央語の転移、(ii)「標準語vs.方言」に対する言語政策の違いが両言語の文法カテゴリー、否定極性表現の統語構造にも影響を与え、〈表1〉-〈表3〉のような相違点を引き起こしたと考える。以上、本稿の仮説(47)が妥当であることが明らかになった。

6) 厳密には、高麗時代までを入れると千年以上ソウル方言が中央語として用いられていることになる。当時の首都は今の北朝鮮の開城であり、ここは京畿方言に属し、さらにソウルは京畿方言圏に入っているからである。

4. おわりに

本稿は限定を表す韓日両言語における否定極性表現「밖에/뿐이」と「しか/ほか」の統語的特徴が先行研究の指摘と違い異なっていることを方言接触の観点から明らかにした。これらの表現は意味論的に限定の意味を持つ、統語論的に否定極性表現としての機能を持つという点で従来類似表現として取り扱われてきた。また、これらの表現は「中央語(밖에/しか)vs.方言(뿐이/ほか)」のような対立関係を持つという点においても類似している。しかし、本稿では韓日両言語は六つの統語環境、すなわち(i)否定文にのみ生起可能であるか否か、(ii)多重否定極性表現構文に生起可能であるか否か、(iii)反語構文に生起可能であるか否か、(iv)後置詞、副詞などさまざまな項目に後接可能であるか否か、(v)名詞に後接する際、属格助詞「의/の」が必要であるか否か、(vi)否定命令文に生起可能であるか否かにおいてそれぞれ相違する点を示すと指摘した。日本語は韓国語と異なり、「しか」と「ほか」が相互分布を成している。実際に、現代日本語において「しか」は文法化が、「ほか」は脱文法化が進んでいる。韓国語の場合、前述した日本語のような言語現象は見られない。両言語においてこのような相違点が見られる原因を探るに当たって、さらなる研究が必要であり、現段階において考えられ得る仮説を立てその根拠を提示した。特に、社会言語学的アプローチで両国の言語政策の相違点に注目し論じた。

上述したように本稿で提示された仮説はまだ検証段階である。今後、インフォーマント調査を用いたさらなるデータの収集が必要であると考えられる。例えば、「뿐이」が広く用いられる全羅道・忠清道などで現地のインフォーマントを年齢別に分けデータを収集する。同じ要領で「ほか」の場合も近畿地方のインフォーマントを年齢別に分けデータを収集するのである。この研究結果は別稿に譲ることとする。

【参考文献】

- 김민수(1973) 『국어정책론』 고려대학교 출판부
 구종남(2012) 『국어의 부정극어』 도서출판 경진
 박갑수(2004) 「표준어 정책의 회고와 반성」 『새국어생활』 14-1, 국립국어원, pp.5-22.
 박승윤(1997) 「밖에의 문법화 현상」 『언어』 22-1, 한국언어학회, pp.57-71.
 시정곤(1997) 「'밖에'의 형태·통사론」 『국어학』 3, 국어학회, pp.171-200.
 이태준(1996) 『문장강화』 창작과 비평
 홍민표(2008) 「일본의 국어 정책」 『사회언어학』 16(2), 한국사회언어학회, pp.301-322.
 江口正(2000) 「「ほか」の2用法について」 『紀要(言語・文学)』 32, 愛知県立大学外国語学部, pp.291-310.

- 小田勝(2008)『日本語史要講』小学館文庫
- 小林隆(1996)「方言の特質」『方言の現在』 明治書院
- 真田信治,(2000)『脱標準語の時代』小学館文庫
- 真田信治(2006)『社会言語学の展望』 くろしお出版
- 柴田武(1983)「標準語・共通語・方言」『標準語と方言 ことばシリーズ』6, 文化庁, pp.22-32.
- 渋谷勝己(1998)「文法変化と方言ー近畿方言の可能表現をめぐってー」『言語』27(7), 大修館書店, pp.18-25.
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版
- 洪思満(1979)「日本語の副助詞と韓国語の特殊助詞との対照研究(Ⅱ)-その持続機能を中心に-」『朝鮮学報』90, 朝鮮学会, pp.1-22.
- 朴江訓(2009)「いわゆる「其他否定」表現について」『日語日文学研究』69, 韓国日語日文学会, pp.123-138.
- _____ (2010a)「日本語の反語構文における否定呼応表現-韓国語と英語の否定呼応と関連して-」『日語言語文化』16, 韓国日本言語文化学会, pp.161-176.
- _____ (2010b)「韓日両言語における「밖에」と「しか」の統語的認可条件」『日本学報』83, 韓国日本学会, pp.47-58.
- _____ (2012)「方言接触による文法化をめぐって」『日語日文学研究』83, pp.203-219.
(DOI:<https://doi.org/10.17003/jllak.2012.83.1.203>)
- _____ (2014a)「限定を表す副助詞における上接語句の文法化」『日語日文学研究』89, pp.21-39.
(DOI:<https://doi.org/10.17003/jllak.2014.89.1.21>)
- _____ (2014b)「韓日両言語における副助詞の文法化-言語類型論の観点から-」『日本語文学』61, 韓国日本語文学会, pp.37-56.
- _____ (2015a)「韓日両言語における否定命令形式の対照研究」『日本語学研究』43, 韓国日本語学会, pp.39-55.
- _____ (2015b)「現代日本語における否定極性表現「きり」の脱文法化」『秋季韓国日語日文学会国際学術大会proceedings』
- _____ (2019)「多重「不定語モ」構文の認可条件-統語処理原理の観点から-」『日本語学研究』60, pp.69-86.
- 宮地朝子 (2007)『日本語助詞シカに関わる構文構造的な研究：文法史構築の一試論』ひつじ書房
- 茂木俊伸(2005)「以外(に)の用法と意味」『日本語複合助詞の研究』平成16年度筑波大学人文社会科学部研究科プロジェクト研究「日本語複合助詞の体系化に向けた記述的研究」研究成果報告書, pp.15-35.
- 山口堯二 (1991)「副助詞『しか』の源流-その他を否定する表現法の広がり-」『語源探求』3, 日本語語源探求委員会編, 明治書院, pp.34-48.
- Kim, Alan Hyun-Oak(1997) The NPI pakkey and Universal Quantifier Negation in Korean. Harvard Studies in Korean Linguistics 6. Susumu Kuno et al.(eds.). pp.323-337.
- Martin, Samuel E.(1975) A Reference Grammar of Japanese. New Haven and London: Yale University Press
- Nam, SeungHo(1994) Another Type of Negative Polarity Item. Dynamics Polarity and Quantification. Stanford: Center for the Study of Language and Information. pp.3-15.
- Park, KangHun(2014) A Contrastive Study of Japanese and Korean Negative Sensitive Items: a Grammaticalization Approach. *Language Sciences* 45. England: Elsevier Limited.

pp.152-172.

_____ (2015) A Discrepancy in the Degree of Grammaticalization of Korean and Japanese Negative Sensitive Items: A Corpus-Based Study. *Japanese and Korean Linguistics* 22. Stanford: CSLI Publications. pp.149-164.

_____ (2018) Grammaticalization of Japanese postpositions: Focusing on yori co-occurring with negatives. *Language and Linguistics* 83. Seoul: Hankuk University of Foreign Studies Language Research Institute. pp.51-73.
(DOI:<https://doi.org/10.17003/jllak.2014.89.1.21>)

【コーパス】

中納言 日本語諸方言コーパス COJADS <https://chunagon.ninjal.ac.jp/cojads/search>

少納言 現代日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search>

【辞書類】

『방언학사전』 방언연구회태학사. [2001년 출판]

『日本語国語大辞典(第二版, 第六巻)』小学館 [2001年出版]

논문 투고 일자 : 2019 .06. 30.
논문 심사 일자 : 2019. 08. 02.
게재 확정 일자 : 2019. 08. 05.

 < 要 旨 >

 韓日両言語の方言接触における対照研究
 — 否定極性表現の場合を中心に —

朴江訓

本稿は限定を表す韓日両言語における否定極性表現「밖에/뿐이」と「しか/ほか」の統語的特徴が先行研究の指摘と違い異なっていることを方言接触の観点から明らかにすることを目的とする。これらの表現は意味論的に限定の意味を持つ、統語論的に否定極性表現としての機能を持つという点で従来類似表現として取り扱われてきた。また、これらの表現は「中央語(밖에/しか)vs.方言(뿐이/ほか)」のような対立関係を持つという点においても類似している。しかし、本稿では韓日両言語は六つの統語環境、すなわち(i)否定文にのみ生起可能であるか否か、(ii)多重否定極性表現構文に生起可能であるか否か、(iii)反語構文に生起可能であるか否か、(iv)後置詞、副詞などさまざまな項目に後接可能であるか否か、(v)名詞に後接する際、属格助詞「의/の」が必要であるか否か、(vi)否定命令文に生起可能であるか否かにおいてそれぞれ相違する点を示すと指摘する。日本語は韓国語と異なり、「しか」と「ほか」が相互分布を成している。実際に、現代日本語において「しか」は文法化が、「ほか」は脱文法化が進んでいる。韓国語の場合、前述した日本語のような言語現象は見られない。両言語においてこのような相違点が見られる原因を探るに当たってさらなる研究が必要であり、現段階において考えられ得る仮説を立てその根拠を提示する。特に、社会言語学的アプローチで両国の言語政策の相違点に注目し論じることにする。

 A contrastive study of Korean and Japanese dialect contact
 — focusing on negative polarity items —

Park, Kang-Hun

This study clarifies the syntactic features of the negative polarity items (NPIs) *pakk-ey/ppwun-i* 'only' in Korean and *sika/hoka* 'only' in Japanese from the viewpoint of dialect contact. These expressions have been treated as similar expressions previously in that they have a semantically restrictive meaning and function as syntactically negative polarity items. In addition, these expressions are similar in that they have an opposing relationship such as 'standard language (*pakk-ey/sika*) vs. dialect (*ppwun-i/hoka*)'. However, this study found that these Korean and Japanese expressions are not similar, on the basis of the following six syntactic environments: whether they can (i) occur in negative constructions only, (ii) occur in multiple negative polarity item constructions, (iii) occur in adversative constructions, (iv) be attached to various items such as postpositions or adverbs, (v) occur in a negative imperatives, and (vi) be attached to nouns without the requirement of the genitive case particle 'uy/no'. Japanese *sika* and *hoka* have mutual distribution, unlike Korean *pakk-ey/ppwun-i*. In fact, in modern Japanese, *sika* is more grammaticalized as an NPI, whereas *hoka* is undergoing degrammaticalization unlike Korean *pakk-ey/ppwun-i*. In the search for the cause of these differences between the two languages, although further research is needed, this study posits a hypothesis focusing on the differences between the Korean and Japanese language policy.